

名人に定跡なし——木村定三コレクションの将棋盤から

(本文pp. 11-14)



口絵1 将棋盤一式 M2888



口絵2 巻菱湖書黄楊空盛り上げ駒・龍山作

名人に定跡なし——木村定三コレクションの将棋盤

副田 一穂

木村定三コレクションに含まれる将棋盤一面（M2888）を、2017年度第三期コレクション展特集「木村定三コレクション：深奥をさぐる vol.3：名人に定跡なし」¹で展示するにあたり、来歴や工芸品としての位置付けについて改めて調査を行った²。その結果をここに報告する。

本作品に関しては、木村定三氏が自らのコレクションの管理のために用いていた手帳³の、1954（昭和29）年の購入記録に、下記の記述がある。

梶将棋盤／厚六寸 二重箱入／第十三期名人戦第四局ニ使用／名人大山康晴／八段升田幸三 箱書／板谷5

末尾の「5」は購入月を示す。したがって木村氏は、第13期名人戦第4局（1954年5月24日、25日）の対局後、間をおかずに本作品を入手したことが分かる。購入先と思しき「板谷」という名は、当館に寄託された木村氏の手帳全13冊に記載された作品のうち、唯一この将棋盤の項にのみ登場する。当時中京圏でタイトル戦に用いる盤の手配が可能という特殊な条件を考えれば、この人物は棋士・板谷四郎（1913（大正2）-1995（平成7））である可能性が極めて高い。生前の木村氏を知る日本将棋連盟名誉会員・鬼頭孝生氏によれば、木村氏自身も将棋を嗜み、板谷とも交友が深かった。本作品には木村氏にアマチュア四段を允許する免状が付属していることから（詳細後述）、木村氏自身もそれなりの棋力を備えていたことが分かる。木村氏がいつ将棋を指すようになったかは不明だが、1940（昭和15）年に熊谷守一に宛てた書簡に「先生との将棋は大に愉快に有之候 他日又一戦を交え度存じ居候」とあり、熊谷とは将棋仲間でもあったようだ⁴。

板谷は1959（昭和34）年に現役を引退、日本将棋連盟理事を務めたのち、1970（昭和45）年に友人知己の援助を受け名古屋市中区・坂種ビル5階に板谷将棋教室を開き、同所に日本将棋連盟東海本部（現・日本将棋連盟東海普及連合会）を発足させてその初代本部長に就任するなど、中京圏の将棋普及に尽力した⁵。木村氏はこの板谷将棋教室開設の支援者のひとりであり⁶、開所祝いに熊谷守一の書「自當知」を送ったとされる⁷。年代から考えて、その前年

1 「木村定三コレクション：深奥をさぐる vol.3：名人に定跡なし」2017年10月6日—11月19日、愛知県美術館展示室7。

2 本調査には、日本将棋連盟東京本部事業部・小泉勝巳氏、日本将棋連盟名誉会員・鬼頭孝生氏、棋聖堂三輪基盤店・三輪京司氏、板谷四郎氏長女・山本三枝子氏より多大なご協力を賜った。記して感謝する。

3 この手帳の内容については、本紀要所収の足立好弘・長屋菜津子「特別寄託「木村定三氏手帳等の資料」について」15-21頁に詳しい。本作品に関する記述は、1953（昭和28）年1月から1963（昭和38）年8月の収集記録を収めた「手帳3」に含まれている。

4 熊谷守一宛木村定三書簡、1940年9月18日付。石崎尚・福井淳子編「木村定三と熊谷守一をめぐる往復書簡（翻刻）」『愛知県美術館研究紀要23号木村定三コレクション編』2016年、123頁。

5 「「天才は故郷に入れられず」というが、板谷八段の場合は異例だった。友人知己が相談して道場を作ってくれるという。こういう機会は二度とあるものではない。よろこんで、このご好意を受けることにしたのであった」。町田進「棋士訪問記（15）板谷四郎八段の巻：やるぞ！東海初代本部長」『近代将棋』21巻4号、1970年4月、144-148頁。

6 前述山本氏への聞き取り調査（2018年1月19日）に基づく。

7 前述鬼頭氏への聞き取り調査（2018年1月19日）に基づく。また、町田は日本将棋連盟東海本部の室内の様子を描写するな

に揮毫された当館・木村定三コレクション《自當知》との強い関係を窺わせるが、残念ながら現在この書は教室および本部の度重なる移転に伴い行方が分からなくなっており、これ以上委細を明らかにし得ない。なお『仏説無量寿経』から採られたこの警句について、木村氏は「何事も人に聞くのでなく自分自身で工夫しなければならぬという意味」と解説しており⁸、また板谷は後年座右の銘として同句を挙げている⁹。



熊谷守一
自當知
1969（昭和44）年
35.2×70.8cm
愛知県美術館・木村定三コレクション
KT78、JC200200008000

盤 一面 総高27.8 厚18.0 幅34.0 奥行37.0 cm [口絵1]

カヤ製。天地柂で木目が緻密かつ真っ直ぐに通る、高樹齢で極めて良質な材が用いられている。目盛りの漆塗膜が若干ゆず肌（orange peel）を呈しているため、梅雨時のように過度に高湿な環境下で乾燥させた可能性が高い。本作品を実見した棋聖堂三輪基盤店・三輪京司氏によれば、タイトル戦に用いるような高級な盤であれば、目盛りの工程は高湿の時期を避け、またゆず肌が出れば引きなおすのが一般的である。したがって、本作品には完成を急ぐ特段の事情があったとも考えられるが、現時点では推測の域を出ない。脚は嵌め込みで、脚側に算用数字、盤側には一、>、>>、>>>の符号を用いて対応関係を示す。盤裏面の中央は、対局後の棋士の揮毫を見越して蠟引きを避ける。盤上には無数の駒の打痕が見られ、かつての熱戦を偲ばせる。桐覆、台指が付属し、桐覆の裏面および台指蓋裏・内側面に記念署名（詳細後述）がある。

巻菱湖書黄楊杔盛り上げ駒・龍山作 一組 [口絵2]

杔と呼ばれる斑入りのツゲ材を用いた盛り上げ駒（駒木地に彫った文字を錆漆で埋めて研ぎ出したのち、さらに筆で漆を盛って駒字を書いたもの）。王将の駒尻に「龍山作」、玉将の駒尻に「巻菱湖書」と駒銘がある。巻菱湖（1777（安永6）—1843（天保14））は「幕末三筆」のひとりと謳われた能書家で、大正期より駒字として用いられるようになった¹⁰。豊島龍山（初代龍山・豊島太郎吉：1862（文久2）-1940（昭和15）、二代龍山・豊島数次郎：1904（明治37）-1940（昭和15））は近代将棋駒の祖とされ、駒字の研究や新書体の開発、字母帳の編纂など、現在の駒作りの基礎を築いた駒師である¹¹。

かで、次のように述べる。「なによりも、筆者の眼をうばったのは、壁面を領する、熊谷守一の書幅であった。「自当知」と読む。美しい書体である。行く雲をしばしとどめ、山野にそよぐ枯草を招きよせたような見事な自然の象徴が、ここにある」。町田、前掲記事。

8 木村定三「若干の作品解説」『書：熊谷守一』神無書房、1980年、7頁。

9 日高淳次・中村泰夫「この人に聞く〈第155回〉将棋の道一筋に：日本将棋連盟東海本部長 板谷四郎さん（名古屋市在住八十一歳）」愛知県教育委員会編『教育愛知』42巻9号、1994年12月、愛知県教育振興会、32-36頁。「先生のお好きな言葉、座右の銘のようなことは何ですか」という質問に対し、板谷はこう答えている。「『自当知』といって『自ら当に知るべし』という言葉です。仏教にある言葉でね。知ったような気になっていても、実は案外知らないということもあるものです。本当のことは何だということを知るべきだと思います。本当は何だということを知ること、これが大切なのです」。

10 増山雅人『カラー版：将棋駒の世界』中央公論新社、2006年、65頁。

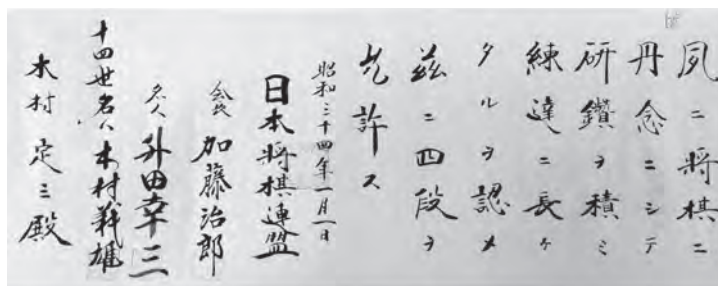
11 同書、112-113頁。

駒台 一対 各高26.5 幅13.2 奥行13.2 cm [口絵 1]

クワ製。櫓型（四脚）の駒台で、天板は一枚の材を木表と木裏に割り開いて用い、一対で空を対称にする。

木村定三宛アマチュア四段正式免状 1959（昭和34）年 一巻 巾22.8 cm

能筆で知られる棋士・荒巻三之（1915（大正4）-1993（平成5））の手による。日本将棋連盟会長以下3名の自筆署名がある。「夙ニ将棋ニ／丹念ニシテ／研鑽ヲ積ミ／練達ニ長ケ／タルヲ認メ／茲ニ四段ヲ／允許ス／昭和三十四年一月一日／日本将棋連盟／会長 加藤治郎／名人 升田幸三／十四世名人 木村義雄／木村定三殿」。



その他の付属品

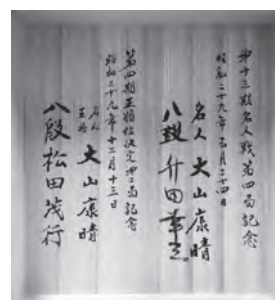
その他に駒台を収める落とし戸式の木箱、駒を収める駒袋が付属するが、タイトル戦で用いるのであれば当然付属しているはずの駒箱を欠く。駒台を収める桐箱内には、駒箱のための収納棚がつくりつけられているが、棚の内寸と駒の寸法から考えると、収まるべき駒箱の寸法があまりに窮屈で、不格好な印象を受ける。名人駒として知られる《宗歩好島黄楊柁目盛り上げ駒》（日本将棋連盟蔵）に付属する堆朱印籠箱のように、適当な箱を転用した可能性も考えられるが、確証はない。

記念署名

桐覆裏面の署名は下記のとおり。

オ十三期名人戦第四局記念／昭和二十九年五月二十四日／名
人大山康晴／八段升田幸三

第四期王将位決定オ二局記念／昭和二十九年十二月十三日／
名人王将大山康晴／八段松田茂行



台指裏面および内側面の署名はそれぞれ下記のとおり。

（裏面）第十四期名人位決定戦／第四局対局記念／昭和三十
年五月十八日／名人大山康晴／八段高島一岐代

（内側面）第十五期名人位決定戦／挑戦者／八段花村元司



対局記録は下記のとおりである（段位・称号は対局時）。

	先 手	後 手	勝 者	棋戦名	対局日	会 場
1	大山康晴 名人王将	升田幸三 八段	後手	第13期名人戦 第4局	1954(昭和29)年 5月24、25日	名古屋市昭和区 「八勝館」
2	大山康晴 王将名人	松田茂行 八段	千日手	第4期王将戦 第2局	1954(昭和29)年 12月14、15日	岐阜県稲葉郡鷺沼町 「犬山国際観光ホテル城山荘」
3	大山康晴 名人王将	高島一岐代 八段	先手	第14期名人戦 第4局	1955(昭和30)年 5月17、18日	名古屋市昭和区 「八勝館」
4	花村元司 八段	大山康晴 名人	後手	第15期名人戦 第4局	1956(昭和31)年 6月12、13日	名古屋市昭和区 「八勝館」

対局1については、終局後の両棋士による本作品を挟んだ指し手検討の様子と、桐覆に揮毫する升田幸三の姿を捉えたスナップが残されている¹²。その他、対局2については『岐阜タイムス』で二日間にわたって報じられ¹³、また松田茂行八段による自戦記が『将棋世界』に掲載されている¹⁴。対局3については升田幸三八段による解説と、記者による観戦記が『将棋世界』に掲載されている¹⁵。大山康晴名人が五期連覇を達成、永世名人の資格を得たため特に注目を集めた対局4については、記者による盤側雑記に加え、巻頭グラビアで大山名人の肖像写真と朝日新聞東京本社前の大盤解説の様子のスナップが『将棋世界』に掲載されている¹⁶。



対局1の指し手検討と揮毫の様子
『将棋世界』18巻8号口絵
1954年8月

本作品にまつわる対局記録は、木村氏がこれを入手してから少なくとも三度、棋戦に貸し出したことを示している。美術品としてみれば異例のことだが、棋界ではタイトル戦に際して地元の愛棋家が盤を用立てるのは珍しくない。考古遺物から近現代絵画まで実に多様な作品を含む木村定三コレクションといえども、将棋盤は鑑賞の対象としてのコレクションの定跡からは外れた印象を受ける。しかし、たびたび茶会を催し、使えば使うほど価値を高めてゆく道具の美を追求めた木村定三氏のコレクターとしての姿勢を、茶道具類とはまた異なる角度から検証しうる点において、この将棋盤もまた貴重なコレクションのひとつであると言える。

12 『将棋世界』18巻8号、1954年8月。また同号には板谷四郎による解説が掲載されている。板谷四郎「名人戦第四局：升田八段一勝す」同書、18-25頁。

13 『岐阜タイムス』1954年12月14日付朝刊5面「互いに長考続く：王将戦第二局」、『岐阜タイムス』1954年12月15日付朝刊5面「ついに千日手：王将戦第二局」。

14 松田茂行「王将戦第二局：大山氏の得意にとびこむ」『将棋世界』19巻3号、1955年3月、6-9頁。

15 升田幸三「名人戦第四局：高島無念の逸機」『将棋世界』19巻7号、1955年7月、6-15頁。

16 『将棋世界』20巻8号、1956年8月。吉井栄治「第十五期名人戦第四局：花村勝負処を誤まる：升田王将・板谷八段に訊く」同書、6-15頁。